

豊かな表現をはぐくむ家庭分野の指導の工夫

阿部 睦子
技術・家庭科

要 約

「豊かに表現する生徒を育てるⅡ」として、本校あげでの取り組みの中、家庭分野で育まれる豊かな表現とは何かと改めて考えてみた。また、前回の研究発表「豊かに表現する生徒を育てる」において、家庭分野が合科ではあっても「異文化交流」を扱ったことを考慮し、本研究では「異世代交流」を中心に考えることとした。その結果、新学習指導要領の家庭分野で重視されている「家族と家庭生活」の幼児との交流を取り上げ、研究を進めた。

幼児期の子どもは、泣くなど生理的表現、即ちいわゆる表出から、自分の気持ちを伝える表現に至る意思疎通の技術を習得していく。そのような成長の著しい時期の子どもとの交流を通して、中学生が幼児の拙い表現を汲み取る力をもち、共感する気持ちを素直に表現する体験を共有する。そこで、中学生が幼児に対して、また、人としてのよりよい表現について考えることをねらいとした。

幼児の表現については、調べるほどに奥が深いものである。中学生が幼児の表現から学ぶことも奥が深い。中学生の人間味あふれる豊かな表現についても更なる研究が必要と思われる。

キーワード 交流 共感 表現 汲み取る力 連携 表現の根っこ

I 主題設定の理由

本校では、平成7年度から表現をテーマとして研究を進め、平成10年には公開研究会が開かれた。その折りに、家庭分野は帰国子女教育として英語科との合科で研究を進めたが、私が赴任する1年前のことである。帰国生徒と一般生徒が心の垣根を取り除くための体験的学習として調理実習を取り入れて、異文化体験の共有を試みている。

また、平成11年度より立ち上げられた今回の公開研究会の統一テーマが「豊かに表現する生徒を育てるⅡ」となったため、主題を「豊かな表現をはぐくむ家庭分野の指導の工夫」として、家庭分野のなかの表現について考えを巡らせてきた。

平成10年7月に示された教育課程審議会答申における技術・家庭科の改善の基本方針を踏まえ、平成11年9月に告示された学習指導要領の内容の「家族と家庭生活」では、「生徒が幼児とのかかわりを通して、家族や周囲の人々との人間関係の大切さや家

庭生活を営む意義を見いだしたり、(中略)、よりよい生活を主体的に工夫できる能力や態度をねらいとしている。」と、示されている。

この「子どもが育つ環境としての家族・家庭の役割」を指導することや「生徒が幼児とのかかわりを通して」学ぶことをより重視していることは、特に前者の指導について必修とされていることは、現行の学習指導要領の家庭分野で子どもが育つ環境など幼児について扱っていた「保育」領域が、選択領域として各学校の裁量で履修していたのに対して大きな変化と言える。

そこで、先に述べた教育課程審議会答申、新学習指導要領、本校の公開研究会の流れを踏まえると、異文化体験から異年齢との交流に発展させ、子どもが育つ環境を考えて中学生が幼児とのかかわりを持つことが、公開研のテーマに迫る第一歩と考えるに至り、本研究主題を設定した。

II 研究のねらい

本研究主題を踏まえて授業を構成した。中学生が幼児の学習をしたり交流を持つことにより、その表現活動に次のような変化があることをねらった。

・生徒が一生の中で幼児の表現はどういう時期にあるのか気づく。



・幼児期の子どもの直接的な情緒表現などを素直に受け止められるになる。



・自分自身の存在の確かさにも気付く。



・異年齢の幼い子どもに対する適切な表現を考えて、豊かな表現を生徒がするようになる。

また、指導者としては、次のような点に配慮した。

・一人の人間としての幼児が表現したことに対して、共感性をもって対応し、表現することができるようにするため、指導上どのような工夫をする必要があるか考える。

・教育課程審議会答申において、幼児との交流が中学生だけでなく高校生にも強く進められるようになっているが、受け入れてくださる幼稚園ないし保育園と、お互いに過重な負担とならないよう連携を密にする。

III 方法と内容

これまでの取り組みの流れを以下に示す。

1 技術・家庭科における「表現」に関する先行研究の調査

～領域や題材を特に絞らず、家庭分野における表現をテーマにした研究を調べた。～

→保育、幼児との交流を中心に実践記録を調べることとした。

2 実態調査

生徒の幼児とのかかわりについて実態を調べる。

3 授業の方針と工夫

(1) 幼稚園との交流を3回持つこととした。

①幼稚園の先生に話を伺う。

②幼児と幼稚園で遊ぶ。

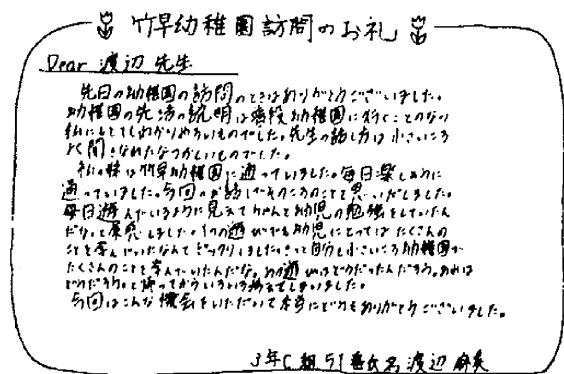
③幼児と中学校で遊ぶ。

(2) 幼児との交流の前後に幼児の心身特徴など、保育の基礎的な学習を取り入れた。

(3) 幼児と中学校で遊ぶ幼児との交流において、中学生が幼児と主体的にかかわれるよう、計画の段階から中学生の意見を多く取り入れるようにした。

(4) 交流のためのおもちゃ作りについては、幼稚園の先生のアドバイスを受ける等、幼稚園との連絡を柔軟にとった。

以下に載せられたのは、幼稚園の先生に話を伺った際のお礼の挨拶だが、端々に感謝を表し、実際に幼児と交流することを心待ちにしている様子がうかがえる。



幼稚園の先生へのお礼の挨拶

IV 実践結果と考察

1 家庭分野の表現研究

家庭分野の実践報告など、研究のテーマの中に「表現」の文言があるかどうか調べたが見当たらなかった。

その理由として、現行および新学習指導要領の目標や内容、さらに、教科の評価の観点および評価規準にも「表現」という文言が使用されていないことがあげられるのではないかと考えた。そのため、これらを基にして発展、展開される授業研究などに表現を扱ったものが無かった、或いは少いために見つけることができなかつたのではないかと考える。

そこで、他の教科について表現に関する記述を中学校の「新学習指導要領」、「教科の評価の観点および評価規準の中間報告」を調べてみると、教科目標、教科の内容、評価の観点、評価規準のいずれかにつ

いて、家庭分野を除く各教科分野では表現についての記述が見られた。このことから分かるように、家庭分野と表現とのかかわりは比較的薄い考えられているのではないか。

しかし、家庭分野で扱う衣・食・住・その他家族を巡る事象には、人の表現とかかわりあう事柄が多くある。

- ・自己表現としての衣服の着用
- ・食卓の雰囲気作り
- ・快適な住まいと室内の環境
- ・家族に手作りの贈り物をしよう

など、表現という言葉が具体的に使われていてもなくても、気持ちを表し、自己表現及び人との関係を形成していくことになる内容を含んでいる。このことは、小・中・高校そして大学を通した家庭科教育で扱う事柄が、人と人、人と物との相互関係から構築されていくものであり、常に「人」そのものを中心に据え、その人格を尊重することを出発点としていることに他ならないと考える。

このことを踏まえ、本研究では、中学生がおもちゃ作りや幼児とかかわることを通して、幼児という人の表現から学び、中学生の豊かな表現に結びつけたいと思っている。

2 幼児と表現

幼児にとっての表現とは、絵を描いたり、ものを作ったり、歌をうたったり、楽器を使って演奏したり、踊ったり、劇をしたりなどと思われがちである。だが、子ども自身の思いや感じたこと、考えていることなどが、様々な行為となったり、表情や状態として見られることも表現として大切なことであると言われている。

生まれたばかりの赤ちゃんも、泣いたり、笑うような表情を見せたり、手や足を動かして自分の心身の状態を表す。ただそれは、赤ちゃんが意識して行っているというよりも生理的な感覚が筋肉の動きになったと考えられ、表出という言葉で言い表せる状態である。一方、私達は、何かを伝えるために必要な手段として、或いは、他の人の共感を求めて、合図を送っている。それが、表現であり、コミュニケーションの手段であるともいえる。

人にとっての表現の意味について、阿部明子は「文字通り内なるものを表に、つまり外面に表すことである。また、現れた形を指すこともある。内なるものとは、何を指すのだろうか。私たち人間の場合は当然心の動きをいう。そうだとすれば、人が生活している所どこでもいつでも表現が伴っていると言ってよい。」と、言っている。また、黒川健一は、「最も人間らしい、人間にだけ豊かにできる営みであり、人は表現によって人間らしい生活ができる。」と、述べている。このような考えに立つと、幼児期の生活そのものが表現活動であり、幼児期こそ人としての適切な表現方法を学ぶ時期であると考えて良いのではないか。

また、幼児にとっての「表現」が、いかに大切であるかが幼稚園教育要領によっても分かる。1990年の改訂で、健康、人間関係、環境、言葉、表現という5つの領域に集約され、初めて「表現」という領域ができた。その後、1998年の改訂においてもそのまま5領域が維持され、「幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域『健康』、人とかかわりに関する領域『人間関係』、身近な環境との関わりに関する領域『環境』、言葉の獲得に関する領域『言葉』、及び感性と表現に関する領域『表現』としてまとめ、示した」となっている。この「表現」は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」ことを趣旨とし、従来、「絵画製作（造形）」と「音楽リズム」とになっていた領域であった。

さらに、1999年に改訂された保育所保育指針、おいては2歳以降の年齢毎の保育内容に「基礎的事項」と「表現」が示されており、保育園児にとって、表現活動が生活の大部分を占めていることを示している。

このように、幼児期の子どもにとって、表現は生活そのものであり、自分の存在を示す活動とも言える。従って、本研究は幼稚園で育てる表現力に偏るのではなく、あくまで中学生の豊かな表現のための研究として、幼児の表現を広く捉えていきたい。

3 中学生と幼児とのかかわり

本校の生徒たちに幼児とのかかわりについて尋ねてみたところ、およそ8割の生徒が「日頃幼児と接する機会がありますか」という質問に対して「あまりない」若しくは「ない」と答えている。

家族に幼児がいない場合、幼児に対して抵抗感を持つこともあるが、幼稚園との交流を行うようになって、幼児に対してプラスの意識に変わった生徒が多かった。



幼稚園児との交流（幼稚園で）



幼稚園児との交流（中学校で）

4 授業の工夫

(1) 幼稚園との交流を3回持つこととした。

保育学習において幼児との交流は中学生にとって効果的な学習方法である。中学校と幼稚園又は保育所の実態に合わせて、1ないし2回の交流を行う場合が多いと思われる。3回行っている学校もあるが数としては少なく、近くに幼稚園又は保育所が無い

ため訪問できない場合もあり、なかなか増えないのが実態であろう。

本校は、教育学部の附属中学校だが、隣接して同じ附属の幼稚園がある。3年間のうち初年度と2年目は年間計画で幼稚園との交流を2回持った。その際の反省及び課題として、幼児との交流のまとめの意味合いや次の課題を持つために、3回の交流ができることが望ましいと思われた。

そこで、今年度は、3回の交流を持つべく計画を進めてきた。内容としては、

- ①幼稚園の先生に話を伺う。
 - ②幼児と幼稚園で遊ぶ。（左写真幼稚園での交流）
 - ③幼児と中学校で遊ぶ。（左写真中学校での交流）
- というものである。

ただ、幼稚園と中学校の日程の関係で、一学年四学級ある内半分の二学級が①・②・③と3回の交流を実施することができる（3回のグループ）が、残りの二学級は②・③の2回の交流しか実施することができない（2回のグループ）。双方のグループは、情報を交換しあって、幼児に対するの関心を高めていた。

(2) 幼児との交流の前後に幼児の心身特徴など、保育の基礎的な学習を取り入れた。

様々な学習の定着のためには、繰り返し行うことが望ましいのだが、実際には限られた時間の中では難しい。

そこで、幼児と遊びの関係、幼児の心身の発達、幼児の生活などの学習を幼稚園との交流の前後に挟み、生徒たちの幼児理解を助けるように配慮した。そのことで、生徒たちが、幼児に対して共感を持って接することができたように思われる。

(3) 幼児と中学校で遊ぶ幼児との交流において、中学生が幼児と主体的にかかわれるよう、計画の段階から中学生の意見を多く取り入れるようにした。

初年度、2年目の交流の反省として、交流の内容についても生徒の思いを反映させるべく意見を取り入れたいというものである。交流のためのおもちゃ作りに関しては、全面的に生徒の意見が取り入れられているが、交流の方法については、時間に押せられ、教師中心で進められている現状である。

の高さを合わせ、適切な表現を考えて接するようになった。

- ・幼児との相互交流（インタラクション）によって生徒の自己肯定感が高まったと言える。
- ・その関係は、一度だけの交流よりも数回であったほうが深まる。しかし、多ければいいというものではなく、全体の生徒を連れていく場合には受入側の体制もあり、3回程度までが妥当と思われる。

このように研究を進める間にも、新聞には毎日のように幼児に対する虐待の記事が事件として取り上げられていた。躰けと称して、或いは腹いせのように、本来ならば保護する立場の大人たちが、保護されなければならない子どもたちに虐待を与え、時には死に至らしめる。このような悲惨な事件の背景には、大人の生育歴と幼児に対する共感性の無さが指摘されている。自分の気持ちを伝えることには熱心だが、相手の気持ちを汲み取ることができないのはインタラクションの欠如といえるのではないか。

人は、「育てられたように人を育てる」と、よく言われているが、だからこそ、生徒たちに「人間の成長の基本を教え、他者がどう感じるかを共感できることを目指す」教育が大切になっているのではないか。そういった意味でも今後も本研究を深め、「表現の根っこ」に当たる部分を生徒と共に探っていきたい。

参考文献

- 1) 黒川健一編著：新・保育内容研究シリーズ／5『表現』 1991，ひかりのくに株式会社
- 2) 森上史朗，柏女靈峰編：保育用語辞典 2000，株）ミネルヴァ書房
- 3) 阿部明子，竹林実紀子編著：新訂幼児教育法シリーズ 感性と表現に関する領域『表現』 2000，東京書籍株式会社
- 4) 大場牧夫著：新保育内容シリーズ『表現原理』幼児の「あrawし」と領域「表現」 1996，株式会社萌文書林
- 5) 伊志嶺美津子：「カナダの子育て家庭支援から学ぶ」21世紀の子育てのあり方 2001，現代のエスプリ